

現代史の歩んで来た道

——現代史を考える・研究ノート(1)——

家田 義隆

この一世紀半、この一五〇年間の歴史とは人間にとって何であったのだろうか。人間はこの間に何をしてきたのか。何をめざしてきたのであるうか。私はこの一五〇年間人間がたどってきた歴史を跡づけ、その中で人間がどうなってきたのか、そしてどこへ向って進みつつあるのかを考えてみたいと思う。

まず何故この一五〇年間を考察の対象にしようとするのかを明らかにしておきたい。それは丁度一五〇年ばかり前から現代史が始まったと思うからである。現代史とは一国、一国の歴史の寄せ集めではなく、地球上の国々が一体となった、お互が直接繋がった、あるいは直接影響を与え、与えられ合う時代、同時進行の時代のことである。真の意味で世界史といえる時代のことである。それまでは世界のある一部分に起ったどんな事件でも、他の部分にとってはせいぜい間接的な影響しか呼び起さなかった。ヨーロッパ史の最大の事件でもアフリカやアジアにとつてはほとんど無関係であったし、南北のアメリカの歴史にも若干の間接的な意味しか持たなかった。ところが一九世紀の半ばころからヨーロッパはアジア、アフリカ、中近東の広大な内陸部

にまで進出し、直接影響を与えることになったのである。ここから現代史が始まった。その現代史は西洋が自己を変革する中から作り出してきたものである。一六世紀から一七世紀のルネサンスと宗教改革によって文化史的には中世から決別して近代世界を生み出した。その時代はまだ政治的には僧侶や君主や貴族階級が権力を握っている中世の延長であったが、そういうものへの批判が芽生えてきた時代であった。批判しながら、一方では庇護されるという曖昧な形であったが、新しい時代の到来を予告するものであった。一七世紀から一八世紀にはまずイギリスで、ついでフランスで市民革命が起り、市民階級が政治に参加出来る時代を切り開いた。その時代の市民は富裕な有産ブルジョアだけであったが、今まで締め出されてきていた第三身分の人々が政治に入ることを可能にした。近代の民主政への第一歩であった。この市民革命を可能にしたのは富裕な市民層が相当数出現し、社会的勢力になったからである。一六―一七世紀のイギリスの経済的発展は農村を変え、織元層を生み出しマニユファクチュアを育成して行つたのである。規模は小さく、生産手段はまだ道具に頼っていたけれども経営形態では今日の資本主義への経済体系を生み出したのであった。

こういう西洋近代の政治、経済、社会の革新が西欧先進諸国で大きな社会変動をまき起し、非西欧世界をまもなく否応なく引きずり込んでくる時代を作り出した。その当初はまだ時間的、空間的に交通手段や通信手段の未熟な状態は地球上を即座に一体化するものではなかったが、その後の進展は徐々に一体の世界を作り上げながら、おおよそ三〇〇年に渡る近代史が終るのである。その終りが一九世紀の前半

で、そのあと現代史が始まってきた。

一八四〇年代から今われわれが生きている時代は始まっている。このころから政治的にはブルジョワジーだけでなくその下の層の人々も先進国を先頭に政治に参加出来る時代が始まり、今日まで不完全な形ではあるけれども、とにかく民主主義の政治を作り上げようとしてきたのである。

経済的には産業革命がイギリスで一段落し、機械による大量生産の産業社会が始まり、以後今日まで地球上のすみずみの国が早い遅いの差はあれ、イギリスに倣って工業化してきたのであり、現在もしているのである。社会的には大量の労働者の出現を生み出し、つづいて大量のホワイトカラーの出現を促し、大衆社会が始まった。

こういう流れがこの一五〇年間の人間の歴史であった。しかしそれが今日大きな転換期にさしかかっている。どこも本当の民主主義（自由と平等を共に確保した）を実現した国はない。資本主義の国家も、この現代史の中で生れそしてその間に消滅に等しい状況にある社会主義の国も、どこもそれを実現出来ないで来た。社会主義国家の最大の宗主国ソヴィエトは、自由を全く犠牲にして、水準の低い平等を若干実現しただけで、消滅してしまった。生き残っている資本主義の国々も大きく変らざるを得ないところえきている。

隆 義 田 家

(1) 政治

この一五〇年間の政治の歴史をふり返ってみると、巨視的には大衆が政治に参加する機会が拡大してきた歴史である。その始点はイギリ

スであれば一七世紀の二度の市民革命であり、フランスでは一七八九年のフランス大革命であった。この市民革命で政治は特権階級だけのするものではなくなり、第三身分も政治に参加する道が開かれた。近代市民社会開始への道であった。と言ってもその時の市民は有産階級のことで、地主、一部の自由主義的貴族、大ブルジョワジーの支配する世界であった。彼等は市民革命以来、自由と平等を求め、特権や、王や君主の絶対支配に反対して権力の主体へのし上ってきた人々であった。その限りで広範な民衆が彼等を支持したのである。大部分は農民（ほとんど八〇〜九〇％）であり、あとは中小のブルジョワジーであり、手工業労働者であった。それらの利害は複雑に分裂していたが、絶対主義打倒では一致できたのである。その人々が近代の大衆である。その中で一八世紀の中ばから始まる産業革命は、農村から大量の工場労働者（無産のプロレタリアート）を生み出し、一九世紀中ごろには貧しい都市労働者が大量に出現してきた。一八五一年のイギリス国勢調査では初めてイギリスの都市人口が農村人口を上回ったと記している。産業革命の開始からおよそ一〇〇年で都市人口が農村人口を追い越し、大量の労働者が都市に生れたことを示している。労働者がふえたことは、それを労働力として吸収する工場がふえたことであり、それを経営する産業資本家が出現してきたことを意味している。彼等産業資本家は新しい中産階級として経済的、社会的勢力を大きくし、大ブルジョワジー、地主階級の政治支配に対して自分達も政治に参加する権利を求め、当初は労働者層と協力して参政権のために闘った。その結果はまず産業資本家層だけが選挙権を得ることに成功した。それが一八三二年の第一次選挙法改正の成立であった。この成立

から新しい中産階級層は労働者層との協力を絶ていく。利害の対立が明瞭になったからである。三四年の救貧法の改正は労働者の生活をますます脅かすもので、労働者は社会主義者と手を組んでいくことになる。そして選挙法を変え、議会制度を変えることで政治への自身の参加を要求するようになる。イギリス各地に労働者の団体が生れた。北部イングランドの工場労働者を主力とする一派、ロンドンなどの熟練労働者を主力とする一派、再び産業資本家と手を組んで共同で運動を進展させようとする一派と、三つの流れに結集しながら運動を展開し、一八四八年の四月まで大きな大衆運動となった。チャーチスト運動がそれであった。運動自身は一八四八年の四月を最高潮に挫折していったが、下層の大衆が政治へなんらかの形で関与してきたものであった。

フランスでは七月革命によって成立していた上層ブルジョワジーの七月王政は時代の流れに適応できず、いたるところで軋を生じていた。日常茶飯事の買収行為、選挙妨害への民衆の不満、労働問題への対応のまずさ、外交上の失敗、選挙法改正の拒否など、国民の不満を醸成させていた。この中で一八四八年二月、二月革命が起きるのである。イギリスと同じくこの一九世紀半ばには、フランスにもイギリスに比べれば規模は小さかったが産業革命が進展し、都市には工場労働者が出現し、新しいミドルクラスの産業資本家が力を得、彼等が新しい要求を掲げて立ち上ってきた。利害が一致していた間ミドルクラスと労働者は同盟していた。しかし革命で相応の成果が得られたとき、両者の利害は明白になった。その対立は労働者の六月蜂起の鎮圧でけりがついた。ミドルクラスは旧上層ブルジョワジー、地主、大農と手

を組み、軍隊の力を使って労働者の動きを踏みつぶしたのである。二月革命は結局悲劇的な結末に終わったが、一時的には労働者が自分達の代表として社会主義者のルイ・ブランやアルベールを臨時政府に送り込んで、自分達の要求を掲げて政治を動かしたのである。英仏とも一九世紀の中ごろ労働者階級が政治に影響し始めたのであり、彼等がこの時代の大衆の仲間入りをしてくる。以後大衆の同意をなんらかの形で得るか、さもなければ暴力で黙らせるかする以外支配することができない時代がきた。大衆が大きく政治に踏み込んできて、それまでのような伝統による政治の時代を終らせたのである。大きな波のうねりはもはやおし止めえないところへきたのが一九世紀の中ごろであった。この事態はイギリス、フランスだけではない。スイスでもイタリアでもオーストリアでもプロシアでもそうであった。二月革命の影響はいたるところで憲法発布の布告を出すことを大衆に約束させたのであり、ドイツの統一運動推進の布告であり、イタリアのリソルジメントの推進であった。またバルカンの諸民族が列強の均衡を調整する駒から自己に目ざめ、制御出来ない民族主義的な激しい動きを始めるのもこのころのことである。

こうして社会的勢力としての大衆は出現した。その大衆は一つのまとまりとしては大勢力であったが、利害が複雑に分裂し、お互に対立する要素を多分に持つ集団であった。地主と小作農の対立、産業資本家と労働者の対立、地主・自作農と労働者の対立、自由主義者と社会主義者の対立、自由主義者と保守主義者の対立、等々容易に分断され、利用されてしまう弱点を内に抱えているものである。二月革命が六月に壊滅してしまったのも、自由主義貴族とブルジョワジーと農民の連

合戦線が旧王党派までまき込んで、社会主義者と労働者を踏みつぶしたからである。共和制の急進化に直面して、自分達の利益を守るため革命からさつと身をひるがえしたのであった。二月革命が勃発するまでは、七月王政打倒のため、ブルジョワジー、地主、農民と労働者は手を組んでいた。同じ労働者でもチャーチスト運動が挫折したように、ラジカルな流れと、穏健な流派の路線のちがいが、指導者間の不一致は地主や産業資本家につけ入る隙をいくらでも提供するものであった。アメを与えて分断することはむづかしいものではなかった。その最適の例がナポレオン三世の演出である。ムツソリーニやヒトラーに先立ってペテンで権力を握り、トリックで権力を保持した。それができたのは普通選挙権の獲得で政治に参加できるようになった大衆を実にうまく利用したからである。プレス統制で多数派を作り、それを基礎に選挙で大衆から票を集め、あつという間に専制政治へもつていったのである。決して古代ギリシアや中世イタリアの僭主のように暴力で権力を奪ったのではない。あくまでも合法的な形で大衆の同意を基礎にしている。現代史の始点ですでにその後の大衆操作による現代政治のあり方は示されていた。参政権を得て議会で政治を変えていくというプロセスが、一面では非常に危険なものであることをすでにナポレオン三世が警告していたのである。世論を巧みに操作すれば、分裂している大衆は思うように動かせる。参政権の獲得でほつとしている大衆は実は無知からくる幻想に酔っていたのであり、現在もそうである。けれども歴史の進行は参政権拡大へと道をとってきた。イギリスでは一八六七年の第二次選挙法改正で労働者階級への選挙権は大幅に拡大された。ウォルター・バジヨットや、ジョン・スチュアート・ミ

ルは選挙法改正による大衆の政治への進出を多数者による専制への道として強く反対し、法案の成立をはばもうとしたが、実はこの時代での危険は多数者の専制ではなく、多数を基盤にした一者の専制であった。後にナポレオン三世のやり方を大がかりにし、暴力を併用したのがムツソリーニであり、ヒットラーであった。現代政治の方向は現代史の始点ではつきりと刻印されていた。

以後ますます多数の労働者が生れた。持てる層と持たざる層の対立は根本的なもので、和解不可能に近かった。持たざる層は社会主義の要求を掲げ、ブルジョワジーや地主や自作農とは調停不可能であった。一八六〇年〜七〇年代までペテンで騙して同意を得るか、暴力で弾圧するよりほか道がなかったのである。ナポレオン三世やビスマルクのやり方はそれであった。しかしいつまでもマキアヴェツリ流の狐であつたりライオンであつたりすることはできない。大衆もそのカラクリに気づいてくる。そのときビスマルクのような保守派は、社会福祉政策による労働者層の懐柔を図るのである。持たざる層もラジカルな運動を修正し、社会福祉政策を受け入れ、生活が守られる道をとる者が出てくる。それは資本主義が矛盾を抱えながらではあるが発展してきて剰余の一部を労働者階級に分配することが可能になったからできたことである。その状況の中で権力と妥協しながら社会主義を實現しようとする大きな流れが生れてきた。もちろんマルクスの流れを汲む革命主義の運動はあつたが、産業の発展は革命を激化させなかった。体制を打倒する道ではなく、現在ある体制機構を改革する立法的なやり方で、言ってみれば既存の体制の中の左翼を占めることで道を開いてきた。この路線はむしろ革命の激化を妨げてきたもので、それ

が歴史の現実の流れである。実際革命が起きたのは産業化の遅れたロシアや中国であった。

こうして体制の中へ徐々に同化していった時代、七〇・八〇年代にはフランスもドイツもアメリカ合衆国も第一次の産業革命をほぼ完了し、イギリスと共に一線に並んで世界市場で競い合うことになった。市場の熾烈な奪い合いが始まり、まもなくアフリカは完全に分割される。すでにこれより一〇〇年前にインドがイギリスの植民地になり、一九世紀の中ごろには中国の半植民地化が始まっていた。否応なく日本が開国して世界への仲間入りをしたのもこのころである。非西欧世界が世界政治、世界経済のシステムに巻き込まれ、直接の影響のもとで世界が一体化してしまう時代が実質的に始まったのであった。国内的には厳しい競争はレッセフェールを次第に許さなくなり、強い生産力を有する大資本が弱い中小資本を併合して独占的企業へと変貌していった。利潤を求める資本の論理は利潤率を下げる単純な自由競争を排除していったのである。巨大な企業が出現した。大量生産が始まった。大企業を経営していくためには巨額な資金を必要とする。いよいよそれを背後で支える金融資本の出番がきた。この中で工場労働者とは異なる労働者の大群が生れてきた。新中間層と呼ばれるようになるホワイトカラー（背広労働者）、事務部門の労働者である。企業の規模が大きければ大きいほど事務部門は細分化され、経理、労務、事務、販売、宣伝等々、いろいろの事務労働者を必要とする。彼等は労働力を商品化し、俸給を得て生活する労働者である。しかし現場のブルーカラーとは違う。経営者側により近いところにおいて直接経営者側と接触することが多く、経営の補助的仕事をする。大多数のホワイト・カ

ラーは経営の下働きをする人々である。経営者層ではないし、ブルー・カラーでもない。正にその中間に位置する人々の出現であった。彼等は都市に住む。都市人口が飛躍的に増加した。一九〇一年のイギリス国勢調査では総人口の $\frac{2}{3}$ が都市に住んでいる。都会化の進展は古くからの種々の共同体を破壊し、どこにも拠り所を失った根無し草（デラシネー）のような人を作り出す。彼等は時がたつと共に労働組合にも職業組合にも、政党にも地域社会の隣組にも積極的にはかわらず、つかみどころのない龐大な数を形成してくることになる。この層はこれから以後ほぼ一世の間、加速的な産業の進展でふえ続けている。さらに大恐慌以後政府の介入による国家の役割の増大は公務員の数を飛躍的に増した。彼等の大半も同じホワイトカラーである。

一九世紀の終りころからの公教育の進展は読み書きできる大衆をふやし、読者層の増加はマスコミュニケーションを発展させた。例えば各国の代表的な新聞は一九世紀の三〇・四〇年代に、通信社は五〇年代に創設されている。大衆廉価紙である、アメリカの「サン」、「ニューヨーク・トリビューン」、「ニューヨーク・タイムズ」、イギリスの「デイリー・テレグラフ」、フランスの「タン」、「プティ・ジュールナル」、ドイツの「ライン新聞」など。通信社ではフランスの「アヴァス」、アメリカの「AP」、ドイツの「ヴォルフ」、イギリスの「ロイター」など、これらが本格的な活動に入るのはいく世紀の末であった。

現代史が始まって五〇年、こういう背景の中で一九世紀末には龐大な数の大衆が政治の世界に登場してきた。財産のない大衆も政治に形としては参加できる地位が得られたのである。政治に参加できるようになった大衆はよくその役割を果し得たのか。残念ながら果し得ない

できたと言ふべきであろう。大多数の大衆は主體的に政治を担つていく意識に欠けていたからである。アメリカ史の初期に生きた人々を除いて、政治は封建時代には貴族が、市民革命後は地方の名望家がするものであった。現代史が始まつて大衆が参加できるようになると、時間も余裕もない大衆に代つて、政党が組織され、政治に専従する政治家が政治をするようになった。選挙民である大衆は自分の要求を政治家に託するよりほかない。しかし多数の有権者の個々ばらばらの要求がその要求どおりに実現されるなどということはあり得ない。結局個々の要求は大衆の要求としてまとめられ、政治家によつて作文されるのである。大衆を操り誘導することはナポレオン三世から始まつており、一九世紀の末にはマスメディアの発達で有利な情報を流すことで大衆の思想と感情を変化させ、大衆の世論を作り上げていくことができるようになった。今も盛んに行われていることである。けれどもこういう状態はよく考えてみればいつでも危険である。特に混乱が生じて自力では解決がむづかしいとき、生活不安が継続し、安定が得られないとき、大衆はベテンとトリックで嵌られていつてしまう。第一次大戦後のナチス・ドイツはその典型である。平常心で顧みれば荒唐無稽なヒットラーの演説になぜドイツ人はついていつたのかと訝るが、第一次世界大戦の敗北と二九年の世界大恐慌の痛手と、二度に渡つてドイツ社会を大混乱に陥し込み、根底からドイツ人の生活を動揺させ崩壊させてしまつた中で、生活の基盤を失い、出口を失つたドイツの大衆はマスメディアを使つてフルに宣伝するデマゴーグにすべてを捧げていつたのである。しかしそのデマゴーグたちは不法に権力を奪取したのではない。古代ギリシア時代やイタリア中世のように暴

力と策略で権力を奪つた僭主ではない。民主主義的な大衆による選挙という手続きを経て、政党間の選挙戦に打ち勝つて支配権を得ているのである。全権委任法を通して合法的に独裁者になつていくのである。こういうことがドイツだけでない現代史の傷ましい悲劇ではないだろうか。それは有権者が安易に為政者のすることを見過ごしてしまふからである。今日でもこの危険はいつ起るともされない。このことは先進国、発展途上国を問わない。一つにまとまることの困難な龐大な無形の大衆は狐の患知恵で総動員されてしまふのである。さらに二〇世紀の狐は軍隊を掌握するライオンでもある。彼等は大衆の怨みや、無意識の野心や、鬱積した怒りや、不満に満ちた憎悪を巧みに操りながら、大衆の利益と幸福なるものを説き、いつでも大衆が反撃に向うや、公権力を動員して容赦なく無慈悲に大衆を打倒し沈黙させる。

一九三〇年代の初めは一方ではファシズムが荒れ狂い、一方では大恐慌の荒波にどこもが疲労困憊していた。社会主義のソ連はその圏外にいたが、一国社会主義の路線の中でスターリニズムが進行し、形がちがう独裁制を展開していた。この中でニュー・デール政策は生れてきた。未曾有の恐慌を克服するにはもはや従来の自由放任主義では不可能であるとの認識から、自由放任主義に真正面から挑戦し、社会的な生産過程全般に国家の介入を企図し、実施していつたのである。このニューデールから経済及びその他の領域は国家の管理と制御のもとに入つたのであつた。ニューデールから七〇年経た今日ますます国家の管理と制御の度合いは大きくなり、国家の介入なしには何事も動かない状況に到つてゐる。社会福祉政策、エネルギー政策、

金融政策、雇用問題、科学技術政策、環境問題、労働立法等々すべてに渡って国家が深く介入している。ニューデール以来、歴大な国家の仕事が増えたのである。当然それを担う官僚の大増加を促した。官僚が国家の諸政策を立案し、社会経済の滑らかな運行を監視している。資本主義的生産に伴う矛盾から発する景気の波動も最小限に収まるよう行政的、金融的に対処している。もはや今日では官僚なしでは国家的業務を合理的に処理することはできない。この官僚化の進む中、政治家は官僚の代弁者になりつつある。政治家は政策の決定者であると思っているが、その実官僚のお膳立てにのる裸の王様になっているのが現実である。それは形式的には議会主義的な立法国家であるが、実質的には行政優位の行政国家へ移行してきていることを示している。戦前ではルーズヴェルトが、戦後ではドゴール大統領がマスメディアを通して大衆に直接呼びかけて自分の政策を宣伝し、支持を得、推進した。立法府を飛び越えて行政が先え進み出したのである。こういう時、大統領が狐であり、ライオンであれば恐怖以外なものない。現に地球上のところどころで狐でありライオンである大統領は出てきている。

それと共にこれから以後は、教育の向上と民主化の進展で、ある程度の教養知識を備え、政治的経験を経た大衆がいたるところで増してくる。二一世紀のうちに地球上の大多数の大衆がそうなるであろう。政治家は容易にはその大衆を納得させることはできない時代がくる。大衆ひとりひとりの要求は千差万別で、それを政治家が全部満足させることは不可能である。大衆が無知である時代は過去のことになる。大衆は容易には騙されなくなる。政治家は世論を作るのではなく、大

衆の作る世論に流されていく。最終的には多数の意見が正しいという原理に立つ民主主義は、政治家を世論に従わせる。しかし多数の意見が絶対正しいとは限らない。限らなくとも最終的には多数の意志は通ってしまう。不正でも公正さを欠くことでも多数派は押し通してしまう。一者の専制も不幸な悲劇を招いたが、多数者の専制も不幸を招くことになる。ミル達がほぼ一世紀余前に不安を感じ、拒否していた多数者の専制がこれから始まるであろう。集団エゴイズムに政治家も流されてしまう日が来るであろう。

(2) 経済

一八四〇・五〇年から今日までの歴史は経済的にはどういう時代であつたのだろうか。そのころ最前線をいくイギリスでは第一次産業革命が終了し、機械の使用による工場制度が拡がっていた。それを担う中小産業資本家たちは自由放任主義の体制のもとで競争しながら利潤を蓄え、それを再投資して規模を大きくしながら分業生産によって大きな生産力を作り出した。イギリスについて、アメリカが産業革命を行い、フランスもそのころ小規模でゆつくりした形で入っている。ドイツではイギリスの産業革命が完了するころ入っている。早い遅いはあつたが、一九世紀の後半にはそれぞれ産業革命を経て同じ産業資本主義の時代を迎えた。どの国も無数の小企業が利潤を求めて競い合った。そのときには競争に勝ち残ることが至上命令であつた。勝ち残るためには利益を上げ、再投資し規模を大きくして生産力をあげることであつた。利潤を上げるには販売価格を上げるか、コストを下げるか

である。過当競争的に競い合っているところでは価格を上げことは不可能である。コストを下げるがこの時代の利潤獲得の道であった。その犠牲になったのが初期の労働者たちであった。だから産業革命期の貧しさは産業革命がもつとも進んだ段階で大量に現われたのである。もつとも生産力が高くなったところがもつとも高い生活水準に達したのではない。まず利潤を得、それを再投資して生産力を高めることが競争に勝つ第一歩で、そのために産業資本家たちは血道をあげて闘ったのである。労働者に配分される余裕はなかった。こういう精神が後には効率のあくなく追求になってくる。初期の段階ではいかに労働者を低賃金で働かせるか、強い言葉で言えば技術的手段が劣等であれば、どれだけ労働者から搾取し得るか、ということであった。それでもそういう中でまだ当初は熟練職人の役割は大きかった。彼等の熟練さに利益を出す源があった。職場で仕事の段取りをし、人を集め、主人の代理をし、請負親方としての役割を演じていた。しかしほどなく彼等の役割は終る。機械化が進んでくれば高賃金の熟練労働者は不要になり、彼等の持っていた技能や知識や勘は機械システムの前に消えていくことになる。熟練職人から工場労働者になってしまったのである。それが一九世紀の七〇・八〇年代で、このころには先進国は一線に並んで世界市場で競い合うことになった。国内では熾烈な競争はいかなくてもしがたく価格の下落を伴い、利潤を下げる方向に動いた。利潤を確保するためには結局は競争を排除していくことであった。大企業が小企業を併合し独占化の道を取った。企業規模の拡大と効率を求める企業家の精神は合理的な経営を目ざし、一方では高能力の機械を求め、他方では労働者の管理化を進めていく。アメリカの

テーラーが打ち出したテーラーシステム、それを後に発展させたフォードによるベルト・コンベアシステムの導入は、機械化と労働の管理化をおし進めたものである。いまや機械が仕事の速度を支配し、労働者は機械に支配される世界が生れた。ベルトコンベアによってシステム化された環境の中で、自身が機械の歯車の一つになり、単調な仕事を何を作り上げるという目的もわからず、繰り返すだけになった。正にチャップリンが「モダン・タイムズ」で描ききった世界である。農民が丹誠こめて作物を栽培する時に感ずる心からの喜びもなく、丁寧に、時間を無視して思うまま自分の納得のいく作品を仕上げる職人の満足感もない、ただパンのためにだけ労働する時代が始った。

こういう労働の上に、経済は巨大な生産力とそれが生み出す大量の生産物を溢れ出させた。需要を上廻る供給は必然的にどの国をも世界市場へかり立て、帝国主義への道をとらざるを得なくさせた。大企業を背後で支えていたのは金融資本で、このころから産業と金融の癒着が始まり、次第に金融資本の傘下に産業は入って行くのである。帝国主義への衝動はさまざまの形で経済と政治権力を結びつけ財政癒着を避け得ないものにした。産業資本主義時代の黄昏は目前に迫った。その中で創業者的な産業資本家はその経営における主体的役割を次第に手離していく。企業の経営は企業内で育ってきたサラリーマン出身の経営陣（ホワイトカラー）がとって代わる、よく言われる所有と経営の分離である。

第一次大戦は新しい経済体制の国家を生み出した。社会主義国家ソ連邦の成立である。それは従来の資本主義国とは全く異なる全生産手段

の社会化、私有財産制度の廃止を根幹とするもので、資本主義経済にみられる生産の無計画性に対して計画経済によって運営する体制を作り出した。資本主義陣営では完全にアメリカの時代がきた。イギリスからアメリカへの経済のヘゲモニーは移ったが、経済システムは大戦前のあり方で、自由競争と利潤の追求を根幹としていた。しかし資本家の判断にのみ将来が託されているところでは需給のバランスは計れない。特に産業世界が拡大し、複雑になり、技術の向上で生産力が大きくなると「見えざる手」は働かなくなった。需要に合わせてどれだけ供給されるか計れない。一般には産業革命以後経済の拡大傾向は常に供給が過剰気味であったことを意味していた。生産に見合う有効需要は小さかった。購買力が生産に見合うだけふえなかった。それが何度かの小規模な経済恐慌を起してきたが、二九年に起った恐慌は文字通り世界恐慌で、一流国、二流国を問わず資本主義世界に壊滅的な打撃を与えた。工業生産でも、世界貿易でも、国民所得でも、資本主義国全体でほとんど半減し、失業者は三〇〇万人を越えた。ここから経済のシステムは大きく変わるようになった。ルーズヴェルト大統領によるニューディール政策の導入がシステムを変えたのである。それは今までの自由放任政策の破棄であった。政府自らが経済活動に立ち入り、仕事を作り出して雇用を拡げ、財政支出によって経済を刺激し、農業を保護したものであった。資本主義の枠内で社会主義的な政策もと入れれた。経済を計画的に運営する道を開いたのである。計画化することで景気の好、不況の落差を小さなものにしようにとした。政治で述べたようにここから経済への国家の役割は決定的なものになる。経済的な機能障害の除去、経済のシステムに大きな変動をきたしそうな

事態の回避防止は国家の重要な仕事となった。自由放任、自由競争の世界で野放しになっていたものを行政が規制することになったのである。専門的な官僚がそれを担う。龐大な仕事は政治、特に行政の仕事となる時代がきた。大きな政府たちざるを得ない時代がきたのである。こういう流れは時間の差はあれ、どの国でも同じように進んだ。現代史が始まって以来、地球上の国々がそれぞれ個別的に独自に歴史を展開するという世界はなくなってきた。一九世紀の中ごろからは一流国、二流国を問わず、イギリスを中心とする一つの世界であった。イギリスが発明した機械をどの国も使わざるを得ず、イギリスの工業経営を模ね、イギリスに追従して国際貿易をし、英語を使い、ポンドを重視せざるを得なかったのである。各国がイギリスに従うことで経済の運営ができたのである。この時代はイギリスがクシャミをすれば各国は風邪をひいた。第一次大戦ころからはアメリカがその地位を奪い取り、各国はアメリカに従わざるを得なくなった。そのアメリカで世界恐慌が起ったのである。一国社会主義で運営されているソ連邦を除いてどこもが甚大な被害をこうむった。そして半世紀が過ぎた。

第二次大戦を経ながら世界の経済はどうなってきたのか。ますます国家の役割が大きくなってきているのがその一つである。政治の項で書いた通りであり、経済の政治への依存は決定的になっている。国家財政のどの項目をとってみてもそれが経済に結びついていないものはない。公共投資はたしかに雇用を守っているものであり、社会保障関連への支出は有効需要を保障しているのであり、公共料金を規制することで物価に影響を与え、独禁法で不正な経済活動を防止し、労働立法

を制定することで、労使間の調停をし、経済の公正さを維持している。そしてまた金融財政政策で景気の調整をしている。政治が経済に総合的に介入しているのが現状である。もう一つは無駄の上に経済が成り立たざるを得ない構造になってしまっていることである。例えばアメリカでは国防費及びその関連支出は一面ではアメリカ経済を支える柱になっている。考えてみれば、軍需物資の生産は生活を豊かにするような生産ではない。無駄な生産であり消費である。けれどもこの項目を削減することはアメリカ経済の構造的安定性をそなってしまうことになる。人間にとって無駄なもの、いや害になるものでありながら、それに依存せざるを得ないのが現状である。同様に各企業が毎年投ずる膨大な宣伝広告費、ほとんど無駄に近い。今日のように宣伝広告が氾濫している世の中では、よほど誇大な広告か、嘘（不正表示、偽装、書き変え）の広告でなければ効果はない。ほとんど無視され、かき消されてしまうのである。けれどもその産業の分野は大きな雇用を支えているのであり、なくすることはできない。また必ずしも生活に役立つものでも、便利なものでもないものが売りに出される。なぜこんなものが流行るのかわからないのに流行って買って買わされてしまうこともしばしば経験する。中身が重要なのに外側を飾り立てて売っているのも、考えてみれば無駄なのである。無駄の経済である。企業の設備でも同じことである。まだ充分稼働し更新する必要のない設備を早目に廃棄してしまうのを助成する政策など、不必要な無駄なのであるが、それが一方では経済の調整をしている。年末になると地方公共団体が十分使用に耐えているのに大渋滞をひき起しながら何度もやり直す道路舗装工事も同じことである。こういう無駄で今日の経済は

成り立っている。働く場が確保され、失業を救っている。今日では自分の持つていけるものだけで十分だとして、必要ないから買わないとすることはなかなかできない。次々と出される宣伝は持たない人を不安にする。若い女性の不安の何割かは、流行している物を持つていないことである。また一度買ったものをいつまでも修繕しながら使用するということもできない。もしみな節約し、買いびかえる考え方が広まったら経済は崩壊とは言わぬまでも大変動をきたし、混乱してしまう。今日の経済システムの中では消費は美德ならずとも、次善の徳ではある。無駄をしながらその無駄が今日の経済を支えている。しかもそういう無駄を作り出している経済の主体は、企業であろうと、国家であろうと恐ろしく合理的に効率を重んじ無駄もなく経営されているのが現状である。この点は資本主義経済であろうと崩壊した社会主義経済であろうと同じで現代世界の本質をなしている。企業の作り出す製品でも行政が与えるサービスでも、作業内容とその流れが細分化され、能率よく仕事が進み、しかも最低のコストで仕上るよう綿密に計算され、組織づけられている。作業者のためではなく効率よく生産するために、機械が導入され、人間を機械に順応させる。人間は効率のために非人間化され、疎外されているのだとも確かに言えるのである。経済の主体は産業組織であれ、行政組織であれ、能率と効率を求め、全社会的規模で管理化を進めている。

この一五〇年間をみてみれば、増大した生産力の向上は確かに労働時間を短縮しつつあるし、生活水準を上げている。これは人間にとって一つの大勝利である。しかし反面では仕事の不愉快さがより強くなってきたのもまた事実である。ますます単調になり細分化され、繰

り返しの作業を要求する。こういう流れの底で一貫している考え方が能率であり、効率の概念である。しかしこのことがあまり極端にすめられると労働における人間の自由と尊厳は犯され、奪われてしまうことになる。これからはロボットが益々導入されるようになるが、能率と効率をさらに上げるためにロボットを導入するのではなく、人間らしい、人間に適わしい働く場を提供するためにロボットを導入していくのでなければならない。そうでなければ働く場から人間は逃げてしまう。若者のフリーターの現象はそのことを一面では表現しているものである。

またこうして発展してきた経済は、世界の資源を食い盡し、大気を汚し、海洋を汚染し、土壌を汚濁し、地球全体を危機に追い込んでいる。どういう道をとるか正に正念場に立っているのが現状である。今までのように経済成長にだけとらわれて資源を食い盡し、公害をまき散らし、強い者勝ちを称讃するような現状のままの資本主義経済では明日の世界は破滅である。それをやめて生産を縮小すれば、世界の経済は停滞し、先進国も人口暴発を続ける発展途上国も立ち行かぬであろう。このジレンマはこの先、二〇・三〇年常に世界を悩ませることになる。

(3) 社会

産業革命を進行させる中で、社会は大きく変貌していった。イギリスでは一九世紀の初めから、フランスやアメリカやドイツでは一九世紀の中ごろ、それまでの伝統社会は急速に解体して現代社会が始まっ

てきた。どこの国でも産業革命前は農業人口が八〇〜九〇%を占め、その農村社会は血縁的、地縁的基盤による結合を中心とする比較的完結的な社会体系であった。家では家長が力を持ち、肉体の力で農業をするため人手が必要で、家族数の多い大家族が普通であった。情報は主に村落、部落の中だけを巡り、きわめて閉鎖的な生活を送っていた。家族が家長のもとに統率されていたように、村落にも村の階層秩序があり、どの家がどの役割りを担うか決っていた。政治での役割り、村祭での役割り、冠婚葬祭等々、家柄に付随して村の秩序は保たれていた。土着の根がびったりと根付いていたのである。そういう中では個人の生きる社会は閉じられた小社会で、お互に知り合い同志の全人格的交渉のある社会であった。こういう社会のあり方が、産業革命の到来とともに崩壊してきたのである。かつては緑豊かな山村であった所が、立地条件の有利さでたくさんの工場が立ち、またたく間に工業都市が生れてきた。農村から都市への人口移動が始まった。それは旧来の伝統的家族関係を微妙にゆさぶり始める。父、母、成人の子供は労働力として平等な存在になり始め、父親の家庭内での地位と權威を少しずつ掘り崩していった。また農業を離れることは、働く場と住む家を分離させることを進め、親と子、夫と妻が一緒に働く世界を変化させてきた。少しずつ親族間の結びつきを弛緩させてきた。貧困の問題が大きく都市をおおい始め、種々の社会問題が次々と出現してきた。産業化の進展はどこの国でもじわじわとこういう変化を生じさせ、産業革命前の社会と産業革命後の社会を大きく変えてしまったのである。

前述のように一九世紀の中ごろから、イギリスでは都市人口が農村

人口を追い越した。二〇世紀の初めには都市人口は $\frac{2}{3}$ に達している。都市では農村のように大家族である必要はないし、大家族の住む家を構えるような空間はない。小さな核家族が普通の家族になる。仕事を求めて農村から都市に移り住む人々は、お互に知らないもの同志で、ただ働く場を同じくする人々の集合である。彼等は土着の根を断ち切られて都市に漂着した根無し草である。それでも産業革命直後の労働者の場合には、まだ団結して生活を守ろうとする絆があった。失うべきものをほとんど持たなかった当時のプロレタリアート労働者は、向こうみずな、大胆な闘争を仕掛けた。その中で命をかけてまで自分達を守ろうとした。体制そのものをひっくり返してしまうような根元的な変革を狙ったのである。知らない者同志の集まりであったが、それを一つにまとめる連帯意識は強大なエネルギーに満ちていた。しかし一九世紀末からの資本主義の展開は、そういうエネルギーを少しずつ通減させる方向へ進み出した。ホワイトカラー層の出現もその原因の一つであった。彼等は職場が様々で、高度に頭腦的な職場からごく単純な労働まで含み、その社会的地位も高い者、低い者、その収入も多い者、少ない者と変化が大きく、まとまりを欠き、一体感を持たない人々で、根底的には賃金を得て生きる労働者でありながら、一つにまとめることのできない、まとまることも困難なバラバラな人々の集合である。その人々はほとんどが都会に住み、農村社会のような、人々を分け隔てると同時に結び合わせる、伝統、規律、儀礼また地位役割りなどの稀薄な社会を生んできた。初期プロレタリアート労働者のような固い団結心を持たず、次第にルールに順応し、社会集団に埋没して、小市民化の道をたどることになる。

ブルーカラーにしろ、ホワイトカラーにしろ、こういう人々の働く場では熾烈な競争に勝つために使用者は能率を第一に指向し、管理化を進めて、バラバラな社会と正反対の社会を作り出してくることになる。最少のコストで最大の利益を得るため、事務を合理化し、働く現場を効率化し、職場の管理を強め、これらを実現するため組織を固め、機械を導入する。どの企業でも、どの官庁でも、どの職場でも、しなければならぬことを明示し、伝達系統を厳格に規定し、全体として能率よく組織が機能するように組織化している。そこでは個人の意志の入る余地はない。決った流れがあつて、それに働く者は従うことで組織は動く。また自発的な思考力を持たない機械は、状況を考慮することなく、その決った機能を人間に押しつけ、機械の部品のように人間の意志を無視して追い立てる。機械の前では誰も個性的ではあり得ない。ちょっと極端に言えば、画一的な歯車以外ではあり得ない。画一的で標準的であることを機械は人間に要求する。組織化と機械化はスムーズに協働できる人間、命令されたことをそのまま遂行できる人間を評価する。文句を言ったり、疑問を持つことは嫌われる。給料以外に収入のない大多数の現代人は不平不満と苛立ちの中で従わざるを得ない。こうして社会生活の場では、バラバラの個人の集合と、働く場では徹底的に能率化、効率化の進んだ状態の二つの局面に引きさかれた社会を産業革命以来作り出してきたのであり、そういう社会に生きざるを得ないのが現代人の状況である。

それでも衣食住がなんとか満足に充足出来る程度の生活の域にまで達してきた先進国の社会に対して、発展途上国の社会はどうなっているのか。先にも述べたように、帝国主義時代以来の強国間の熾烈

な競争は国内では資本主義を独占形態の資本主義の方向へ向わせ、管理化と機械の導入を推し進め、引きさかれた社会をますます拡大再生産し、対外的には欧米文明の外にあった未開の国々を植民地化するこ

とで自国の経済を安定させ、競争に勝ち残ろうとしてきたのである。先進国の犠牲となったそうした未開の国々の社会は、経済的に徹底して先進国に搾り上げられ、古い社会をそのまま残して一方的に富を奪われてきたのであった。その結果は宗主国となんらかの関わりで繋がる一握りの富者が大多数の国民を搾り取る社会になるか、土地の部族長や土侯王が独裁的な権力を握って人民の血を吸い取る社会を作り出してきている。数パーセントの金持ちと、九〇なんパーセントかの貧乏人から成る社会が未開の国々の社会になった。第一次大戦が終わっても、先進国と未開発国とのこの体系は変わらなかった。そして第二次大戦があり、その後未開発国は政治的独立を得ることとなった。しかし宗主国は独立だけさせて、手を引いてしまったため、新しく誕生した発展途上国は、産業革命をうまく展開することができず、その社会の解体再生が進まなかった。依然として古い状態の社会を引きずったまま、発展途上国は今日にいたっている。

もう一つこの間にロシア革命が起って、社会主義国が生れている。この国家が実現しようとした社会は簡単に表現すれば平等な社会を作り出そうとするもので、そのために壮大な実験をしたのである。ロシア革命はその革命当初の理想はともかく、スターリンの出現以後は、農業を犠牲にしての工業化を社会主義体制のもとで押し進めた。エリート官僚による徹底した計画経済で工業化を実現してきた。機械化と組織化の導入は資本主義諸国の流れとなんら変わるところはない。た

だ自由を完全に犠牲にした上で、低い水準の平等は一応達成したと思われる。しかしソ連の人々はソルジェニツインの描くような、自由の喪失について我慢ならず、二〇世紀のうちに社会主義体制を打破して過去の世界へ押し流した。ロシア革命は歴史上最初の社会主義革命で、それは壮大な平等社会をこの世で実現しようとする実験であった。実験は失敗に終わった。

この間衣食住がなんとか満足に充足できる程度の生活の域に達した先進国では、猛烈な速度で人々の同質化が進んでいる。家庭は夫と妻、一人か二人の子供、社宅か、こじんまりとした戸建て、あるいはマンション生活。家電製品を見れば、持つものはほとんどの家庭も同じである。日常生活のパターンもほとんど変わらず、教育の程度も教養の程度もほとんどバラツキがない。同じニュースを見、同じ娯楽番組を見ている。迅速な輸送手段の成立と、マスコミの発達は大都市も中小都市も似たようなものにしてしまった。農村まで似たものになった。ニューヨークの若者が聞くロックを同時に日本の若者も中国の若者も聞いている。若者の服装も着ているものだけではどこの国の若者か見分けがつかない。その中で一見平和な姿を見せながら、特に先進国では確実に家庭崩壊が急速に進んでいる。

時間の差はあれ産業化するということは、こういう社会を作っていくということである。いま後進の国の人々もいずれはこういう経過をとる。国民性や民族的な違い、宗教の違いから、それぞれ若干のヴァリエーションに彩られてはいるが、これから一〇〇年も経れば、地球上どこでも基本的には結構似かよった社会を作り出していることだろう。ランケが言うようにいま、発展途上の状態にある国々が、「いかに

真似ようともその根元を、いやしくもその歴史を形成してきた地盤を、いな、現在と過去を結び、未来に生命を与える精神まで……」吸収同化しつつした社会を作り出してくるとは考えられないが、この一五〇年の現代史を顧みてみると、現代史の初期にその生を終えたランケには実感され得なかったが、後から追いかける国は、ヘゲモニー国の文物、制度を以外に広く、深く受け入れ、同化してきているのである。現代史の始点では前述のようにイギリスがそのヘゲモニー国で、イギリスの文物、制度を模ねることではかの国々は産業化してきた。他のやり方ではあり得なかった。必死に体制に同化することで脱落から免がれてきたのである。一時的には競争できるまで保護政策に走ってヘゲモニー国に対処することはあっても、しばらくして競争できるようになれば体制に同化した。例えば日本を例として考えてみよう。

この一五〇年間ばかりで日本は大きく変容した。欧米の文物、制度を広く、ある程度深く容れてきた。政治も経済も法律も、そのほか目につくものほとんどが欧米起源のものである。日常生活でも着物を脱いで洋服にし、草履、下駄をやめて靴にした。丁髷を切り落して洋髪にした。変ることが容易ではないと考えられる民族的な感性でもそれが言える。音楽でみれば、日本人の音楽の感性も甚大な影響を受け、変容してしまっている。音階は全く西洋流のドレミファになってしまった。因みに若者に「清元」でも「長唄」でも聞かせてみよう。日本の本来の音楽であったと誰が知っていよう。どこか外国の音楽が流れていると思う。それほど欧米に同化してしまっているのである。ランケが言うように、民族の深いところの魂を流れている精神まで吸収したか否か、はむつかしいところであるが、相当深くまで変容させられて

しまっていることは確かだと言わざるを得ない。政治にしても欧米の民主政というものを、完全とは勿論言えないが、相当身につけて容れているのではないか。経済にいたっては、資本主義の制度も、精神もほとんど同じものを容れている。

これからは発展途上国も行きつ戻りつはあるが文明化が進んでいく。おそらく早い速度で進んで行く。似たり寄ったりの人々がグローバルな規模で拡大してくる。その人々は民主化の進展で政治的経験を、教育の普及である程度の教養知識を持ち、市民として自分達に目ざめる。民主主義では数は力であることを無意識にではなく、現実のこととして実感するようになる。その時目ざめた力は恐ろしい問題を惹き起すことになろう。例えば集団エゴイズムとして台頭してきているものである。この集団エゴイズムに対しては、それをおさえようとするには、さらに巨大な数の集団が必要になってくる。そのようにして巨大な数になった多数者はその利益を守るためにバラバラな姿のまま動き出す。どう対処するのであろうか。

参考文献

- 世界史的考察、J・ブルクハルト 樺俊雄訳
 ランケとブルクハルト、F・マイネッケ 中山治一、岸田達也訳
 汚れた世界、J・ホイジンガ 磯見昭太郎訳
 小国家の理念、W・ケーギ 坂井直芳訳
 歴史の運命と進歩、L・コラール 小島威彦、鈴木成高訳
 ヨーロッパ百年史、J・シヨル 池田清訳
 ヨーロッパ・栄光と凋落、A・J・P・テイラー 川端未人、岡俊孝訳
 大衆国家と独裁、S・ノイマン 岩永健吉郎訳

危機に立つ民主主義、H・ラスキ 岡田良夫訳

現代史の視座、河野健二

大衆社会の政治、W・コンハウザー 辻村明訳

現代民主主義とその展望、福田敏一

デモクラシーのジレンマ、S・ドレッシャー 桜井陽二訳

ヨーロッパの政治構造、M・デュヴェルジュ 西川長夫、天羽均訳

トクヴィルの政治思想、小川晃一

サッチャー時代のイギリス、森嶋通夫

近代の運命、E・ハイマン 野尻武敏、足立正樹訳

現代資本主義の再検討、都留重人編

グローバル・エコノミーⅠ、Ⅱ、H・M・シュワルツ 宮川典之、太田正登、浅野義訳

産業社会のゆくへ、C・カー 嘉治元郎監訳

産業社会の病理、村上泰亮

現代社会における政治と文化、高橋泰昌編

大転換、K・ポランニー 吉沢英成他訳

労働における疎外と自由、R・ブラウナー 吉川英一訳

資本主義認識の革新（思想七三九号） 海老塚明

機械の時代（近代思想史第五卷）、金子武蔵、大塚久雄編

芸術を担う人々（「現代芸術」第三卷）、阿部知二、小田切秀雄他編